

みんなで守ろう！ みどりのまち

皆さんは、森のはたらきをいくつご存知ですか？
まず思い浮かぶのが、光合成によって二酸化炭素を吸収するはたらきです。日



本全国の森林が吸収する二酸化炭素の量は、年間約1億トン。これは、国内の全自家用乗用車から排出される約7割に相当します。先進国の中で日本が6%の温室効果ガス排出量削減（1990年比）を義務づけられた京都議定書でも、新たに整備した森林が吸収する二酸化炭素を削減量に算入することが認められていることから、森林が地球環境保全に大きな役割を占めていることがわかります。

このほか、森林には根を張ることで土砂が流出しないようにするはたらきや、雨水を一時的に蓄え、洪水などを防ぐはたらき、生きものの棲みかとなって生態系を保全する

はたらきなど、さまざまなはたらきがあり、その価値を金額に換算すると全国で数十兆円もの価値があると言われています。

市内でも、このようなはたらきを持つ森林を保全するために、多様な活動が活発に行われています。例えば、大篠原や小堤の里山では地元の生産森林組合と連携して林道の整備を行ったり、間伐林の活用が検討されているほか、びわ湖の水源となる森づくりのために漁業関係者が中心となった植樹も行われています。また、里山ばかりでな



く、野洲川や日野川沿いの森でも、繁茂する竹を伐採する

など森林を保全する活動が行われています。このほか、多



くの自治会が緑の募金を活用するなどして、地域の緑化に取り組んでいます。

市では、このような活動を支援するとともに、一定の開発行為において条例で樹木等の植栽を義務づけるなど、緑豊かなまちづくりをめざした仕組みづくりに取り組んでいます。

重要なはたらきを持つ森林を守っていくには、多くの人の理解や協力が必要です。野洲市が緑あふれる住みよいまちとなるよう、皆と一緒に取り組みを始めてみませんか？

歴史の小窓

—学芸員のメッセージ—

歴史民俗博物館

☎587-4410、Fax587-4413

(57)

第62回銅鐸研究会

「桜井市纏向遺跡と銅鐸の終焉」(仮題) / 7月4日 午後2時～4時

講師...橋本輝彦さん(桜井市教育委員会)

邪馬台国の有力地と考えられる桜井市纏向遺跡に近い大福遺跡や脇本遺跡からは、壊された銅鐸の破片や青銅器鑄型の一部が相次いで出土しています。これらは銅鐸を鑄潰して他の青銅器を鑄造したと考えられます。そこで今回は、銅鐸祭祀の終焉とヤマト政権の成立についての話を聴きます。

事前申し込み不要。聴講には博物館入館料が必要です。

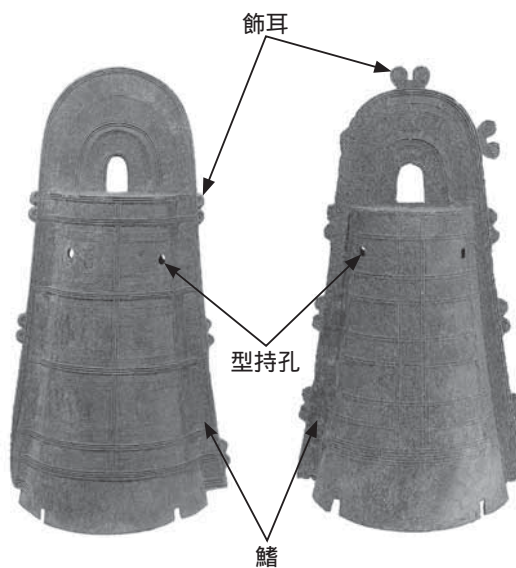
大岩山銅鐸から見えてくるもの

銅鐸は、米づくりが始まった弥生時代に村々で使用された共同の祭器だと考えられています。近年の研究では、弥生時代中期のはじめ(紀元前4世紀ごろ)に名古屋市朝日遺跡から最古の銅鐸鑄型が発見され、名古屋周辺で小型の銅鐸が誕生したと考えられています。その後、近畿地方でより大きな袈裟襷文や流水文の銅鐸が造られるようになり、近畿地方を中心とする村々の祭器となりました。野洲市小篠原大岩山から発

見された24個の銅鐸は、いずれも弥生時代後期(紀元1～2世紀)につくられた大型の銅鐸です。中でも日本最大の銅鐸(高さ134・7cm、重さ45・47kg)はよく知られていますが、大岩山銅鐸の中には、近畿地方の銅鐸「近畿式」と東海地方の銅鐸「三遠式」(愛知県東部の三河と静岡県西部の遠江から大多数が出土することから「三遠式」という)がみられます。

「近畿式銅鐸」は、つり手の頂に渦巻文の飾耳をそな

「三遠式銅鐸」 1962年大岩山9号銅鐸



「近畿式銅鐸」 1881年大岩山・個人所蔵銅鐸

え、型持の孔が長方形で、鰭や外周にみられる三角形の文様(鋸歯文)の内部を同じ方向の斜線で飾るなどの特徴があります。

「三遠式銅鐸」は、つり手に飾耳がなく、型持の孔は楕円形で、三角形の紋様の内部の斜線は互い違いに方向をかけるなどの特徴がみられます。

このように紀元1～2世紀になると同じ銅鐸でも、近畿地方と東海地方では異なる銅鐸を用い、それぞれ祭器の上

からも地域的なまとまりが生まれていたことがわかります。更に大岩山銅鐸を詳しくみると、近畿式・三遠式の両者の特徴をそなえる銅鐸が数多くあり、近畿地方と東海地方の勢力に挟まれた近江の社会状況が銅鐸にも反映しているのです。

3世紀の後半になると村々を統率する有力な権力者が現われてきます。権力者は、権力者自身のためのまつりごとを行うようになり、自らの権力を示す大きな墓(古墳)を

築きます。それまで村々の祭器・シンボルであった銅鐸は、新たな権力者にとっては邪魔な存在となり、銅鐸は、壊されたり、飾耳を切り取られたり、大岩山銅鐸のように広範囲から集められ埋められることとなったのです。

銅鐸が埋められた大岩山丘陵には、その後銅鐸を埋めさせた権力者の古墳が10世代以上にわたって築かれ、このうち今も残る8基の古墳は大岩山古墳群(富波古墳・古富波山古墳・大塚山古墳・亀塚古墳・天王山古墳・円山古墳・甲山古墳・宮山二号墳)として、国史跡に指定されています。

大岩山は、まさに弥生時代の終わりから古墳時代への社会の移り変わりを如実に示す地域として、古代史上特筆すべき遺跡群なのです。

博物館では、実物6点を含む30点以上の銅鐸をはじめ、小銅鐸や銅鐸鑄型などを紹介し、さまざまな機会に弥生社会の謎を読み解く試みを行っています。私たちとともに銅鐸や古墳から古代の謎解きに挑みませんか。

(学芸員 進藤武)